

札幌市環境プラザ運営協議会 令和2年度第2回実施概要

- 1 日時 令和3年2月22日(月) 18:30~20:30
- 2 会場 札幌エルプラザ公共4施設2階 会議室1・2
- 3 出席者
 - (1) 委員：伊井委員、鈴木委員、玉生委員、疋田委員、溝渕委員、森山委員、高松委員、下川原委員
 - (2) 札幌市：環境局環境政策課環境教育担当係長、環境政策課推進係 係員
 - (3) 事務局：(公財)さっぽろ青少年女性活動協会 市民活動担当課長、市民参画課係長、主任指導員、指導員、サポートスタッフ

4 会議次第

- (1) 開会
- (2) 札幌市環境局環境活動推進担当課長 あいさつ
- (3) 札幌市環境プラザ運営協議会について
- (4) 委員自己紹介、近況報告
- (5) 議事
 - ・ 令和2年度事業報告および令和3年度事業計画紹介
 - ・ 環境プラザについての意見交換
 - ① 事業実施における手段(オンライン、対面それぞれの方法について)
 - ② 事業で取り扱うテーマ
 - ③ 上記を踏まえた事業対象者について
- (6) 札幌エルプラザ公共4施設館長 あいさつ
- (7) 閉会

5 議事概要

・ 令和2年度事業報告および令和3年度事業計画紹介

事務局から令和2年度の報告および令和3年度事業計画の紹介を行った。報告では、事業の写真・動画を見ながら事業担当者から参加者の声などを紹介した。

【質疑応答】

● 令和2年度および令和3年度の目標・評価について

Q (委員) 令和2年度はどういったところに重点を置いて目標を立て、それに対する評価がどうだったのか、また同様に、令和3年度はどこに重点を置いた計画なのかを聞きたい。

A (事務局) 毎年の数値目標として「環境教育、活動の機会提供」というものがあり、コロナ禍による施設休館を加味して当初の目標の6分の5程度に下降修正をしたが、オンライン配信事業などに注力することで目標をクリアしている。

また、令和3年度も同様の数値目標があり、それを達成するための計画を作成しているが、別のテーマとしては「『入り口』としての環境プラザを確立していきたい」というのを職員間では共有していて、それに向けてさまざまな年齢層に向けた事業展開をしたいと考えている。

- (委員) 前回も言っているが、数値目標だけでは今回のコロナ禍のような大きな影響があると達成が厳しくなる。数値以外にも、注力するコンテンツ・テーマを定めるなど重点の置きどころを考えて取り組むことが、目標のリスクヘッジ的な観点からもよいのではないかと。
- (事務局) 指定管理制度による目標がある中でテーマを定めることは重要と考えている。ぜひこの後の情報交換でご意見をいただきたい。

●事業の詳細(企画・参加者層等)について

- Q (委員) いろいろな講座を実施しているが、企画にあたりネーミングなど考えていることなどは?
- A (事務局) 環境プラザとして新しいジャンルの内容に取り組むとき、環境プラザがそのジャンルと環境のことをどう結びつけているかについて分かりやすくしたいということと、堅苦しくならないようにいろいろな表現を使うことを心がけている。

- Q (委員) オンライン講座を実施してみて、参加者数や層に変化や傾向はあったか。
- A (事務局) 今までの集合型事業からいきなり人数が増えたなどはなく、2、30人で同じくらいである。情報がオンラインでどう届いているかまだ試行錯誤中なのが正直なところである。変化は二つあり、一つは、興味が合えば札幌以外からでも簡単に参加してもらえるようになり、場所にとらわれなくなったという変化があった。もう一つは、オンラインに慣れている20代を中心に、参加者側の顔や声が出ないウェビナー形式で実施することで仕事終わりの夕食時間でも気軽に参加できるというケースがあった。

- Q (委員) オンライン事業の提供方法によっても違いがあると思うが、どのようにやられているのか。
- A (事務局) オープンな配信事業はまだ実施したことがなく、基本的には環境プラザに参加申し込みをしてもらい、参加用のURLを返送してクローズドな状態で事業を提供するという対応を行なっている。

・環境プラザについての意見交換

事務局から意見交換で求めたいものとして、次年度事業計画を実行するにあたり環境プラザの持っている資源・情報などをお見せしたうえで、委員のみなさまから経験やアイデアをいただきたいこと、事業のターゲティングやテーマ設定についてご意見をいただきたいことを説明した。

●市内小学校との連携について

- Q (委員) 来年度から市内小学校で生徒一人一人にタブレット端末を用意する取り組みが始まる中で、環境プラザが整備を進めているオンラインコンテンツは使用価値があるか。
- A (別の委員) タブレットの用途は調べ学習での活用、クラウドの利用が想定されているため、調べ学習のときに小学生にとって必要な情報がまとまっていれば有用性がある。環境プラザで動画を作成しているとのことだったが、動画やその他の情報がカテゴリごとに整理されているなど、見る小学生および指導する教員に分かりやすい形での整理が望まれる。

●オンラインコンテンツの充実について

【委員からのご意見】

- ・学校での環境教育でいえば、プラスチック選別センターの視察など環境関連施設の見学がある。こういったものを動画にできれば、大人になってから札幌に来た人にも知ってもらえるなど、間口を広げるという目標にも合っているのではないかと。また、オンラインの利点の一つに場所にとらわれなくなったというのがあった。それは例えば道内の博物館とつながって現地の情報を伝えてもらうなども行えると思う。
- ・動画では伝えられないものの一つに匂いがある。そういった五感は伝わらないときにどうするかという視点は必要だと思う。
- ・利用しているプラットフォームとして、Facebook と YouTube があると言っていたが、その違いを考えたとき、YouTube にはアーカイブとしての役割があると思う。投稿が昔でも、初めて見る人にとっては新しい動画だったりする。工作動画など作り方の動画は需要があると思うが、環境プラザでもそういった事業の経験があるので、それを動画化すれば環境の入り口の一つとして残せるのではないかと。

●オンラインコンテンツを閲覧・視聴した次のステップにつなげる取り組みについて

【委員からのご意見】

- ・今後の学校教育の基本として、何かを体験することと調べたりオンラインでつながったりすることの両面をハイブリッドで考えていく必要がある。そのため、動画を提供する際に、何かを伝えて終わりではなく、体験につながる働きかけがあったりさらにその体験をフォローアップする動画があるといった連続性があったり、ということがあると望ましい。
- ・伝えるだけならいろいろな道具を使って伝えられるが、そのあとどうやって子どもたちがアクションプランを立てていくのが重要で、伝えっぱなしではなかなか深化していかないのではないかと。道具だけでなく、アナログの取り組みも重要だと思われる。
- ・いろいろ分野と環境をつなげる入り口になるという目標を考えたとき、オンラインは入り口を広く開く機能はあっても、その関わりはすごく薄いものになる。入り口に入った人をどんな出口につなげていくかという点で、環境プラザだけでなく札幌市と連携しながら、例えば国際会議の関係で来年度大きなテーマになってくるとと思われる生物多様性の保全などにつなげる、など考えられるのではないかと。

【ご意見に対して事務局から】

- ・環境プラザから次のステップにつなげることとして、より専門性の高い別の施設・組織につないでいくことは必要と認識している。年齢層、目的などに分けて、タイプ別にオンラインで完結させるのか、一度環境プラザに来てもらえるような関わりをするのかなど、いくつかのモデルケースを想定したい。
- ・指定管理者制度の5年間の事業計画では、想定できていなかった社会の流れがある。時代に合わせた動きができるよう、札幌市に相談させていただきながらチャレンジしていきたい。

●事業のアイデアについて

【委員からのご意見】

- ・環境に関わる仕事について知ることができたり、環境に貢献できる仕事を紹介するというのを入り口にする視点も良いのではないか。その視点で動画を作る、もしくは実際に仕事をしている方を講師に体験できる講座を実施することができると思う。併せて、その仕事を目指すための高校、大学を紹介するということにつながれば、教育に関わることで子どもやその親を含めて、環境に関わるきっかけの一つにできるのではないか。
- ・今学校では、小学校、中学校、高校それぞれの発達段階に応じたキャリア教育が重視されている。それは単に職業選択ではなく、自己表現にも関係する部分であり、環境に関わる仕事の話を踏まえて、環境を意識した生き方をしたい、という自己表現にもつなげられると思った。
- ・仕事に関わるイベントであれば、おままごと感覚で仕事の内容に取り組むようなイベントがすでにあるので、その環境版のセミナーみたいなものは面白いのではないか。

●プログラムのアイデアについて

【委員からのご意見】

- ・小学校では、節水・節電・ゴミの分別はよく行われているが、この取り組みも次のステップに進まなければいけないと感じている。理科の授業で天気学習はするが、大人は過去と比較して雪が少ない、災害が多いなど関連付けられるが子どもにとっては今生きている環境が全てなので、気候変動を深く学ぶ視点も必要。
- ・ヨーロッパでは気候変動教育が確立されており、国内でも京都などで取り組まれている。気候変動などは地理的、時間的な面で実感が湧きにくい点があるが、それを補うのにオンラインという手段を用いて、プログラム化できれば面白い。

【ご意見に対して事務局から】

- ・プログラムの作成は次年度進めなければいけないと考えている。自分たちだけではエビデンスのある内容を集めるのが難しいので、委員の皆さまのお力もお借りしてチャレンジしたい。

●さまざまな世代への取り組みについて

- Q (委員) ずっとオンラインの話が続き、そうすると子どもを対象にした話が多かった。さまざまな年齢層を対象にするとあったが、では高齢者層をどう対象にしていくか。
- A (事務局) 令和2年度に実施した事業は、テーマが高齢者対象のものが少なく、オンラインが中心だったため、高齢者の参加者が少なかった。とはいえ、コロナ禍が収まらない以上、リスクを負って来てください、とも言えない。今後より通信インフラの浸透が進めば、高齢者の皆さまにも当然のものとなったときに、伝えられる準備は進めたい。